

汗の汗は月未の汗

無名洞一歩あり

漢書

三石の葉紙の中は正楷あり

紙の葉紙をうつる 糸に月敵

明あれもやほふ山南の海制して 秋右

堤の根はくをこもりよなり 抄二

字あり。ひ方はいやま〜泥の臺 乳傍

たら糸うちちかたをたけのかけ 明化



85  
6590  
78





新藤がまほいやらと海の中を  
懐くまうりて海を祥宗  
ゆる又親の蟻蛸の海川を  
あきし海を海に玉を  
雨降ふ海の中を海に身さし  
初し一丁葉をせし海に

山を今も七歳と本懐を  
あきし海を海に玉を  
あきし海を海に玉を  
あきし海を海に玉を  
あきし海を海に玉を  
あきし海を海に玉を  
あきし海を海に玉を  
あきし海を海に玉を

才の禮をなれハ膝りある  
去印様もえハ築架阿保  
後れ才の後をき待く時逢不  
女又石と楚~~知し~~此の勢  
才をまらふ様あやうある花の色  
形<sup>つら</sup>よりおろし田舎もあや

右よりゆり

水さりの花もさくら  
おろしあやうもや  
月夜  
心

ふる中より旅よりぬゆる序

廣外

垣根くわうの事集の序

集石

井海草も福糖の事くをきて

昇六

古きとわぬのこゆり

欽古

人並しとくしんまのこ高い

以文

耳しづれむじ鯛のこころ

松葉

木末く深くあまの月の枝

里伯

竹まきか泳先にあるる橋舟

隈舟

正成の心旅とお月し一

島橋

いはりまのし流とせき

竹化

おこふぬけて葉をひくま

釋東洋

土月の中を

和園

傳らりし新代のまゝのまゝは是れ  
松風

ら髪反すかみもとかまもぬてかまもな  
松石

種類不入しんるいふりまじり合ぬあは湖も田もうみも  
田也いづれ連風

阿漣あゐの浦うら浮うるる林はやしふふああんん  
一更

ま更まああのの写かるるかかろろ花はなのの火ひののまま  
三更

冠かんむりとと心こころとと衣えとと巻まきとと袴はかまのの五ご條じょう二に更ま

ままぬぬのの小こ靴くつつつままららおおのの中ちゆう  
麻あし

煙えん材ざいホホリリももしし靴くつままのの俣へ俣へののたた

活いるるののままをを俣へ俣へののたた  
ののたた松まつ二に

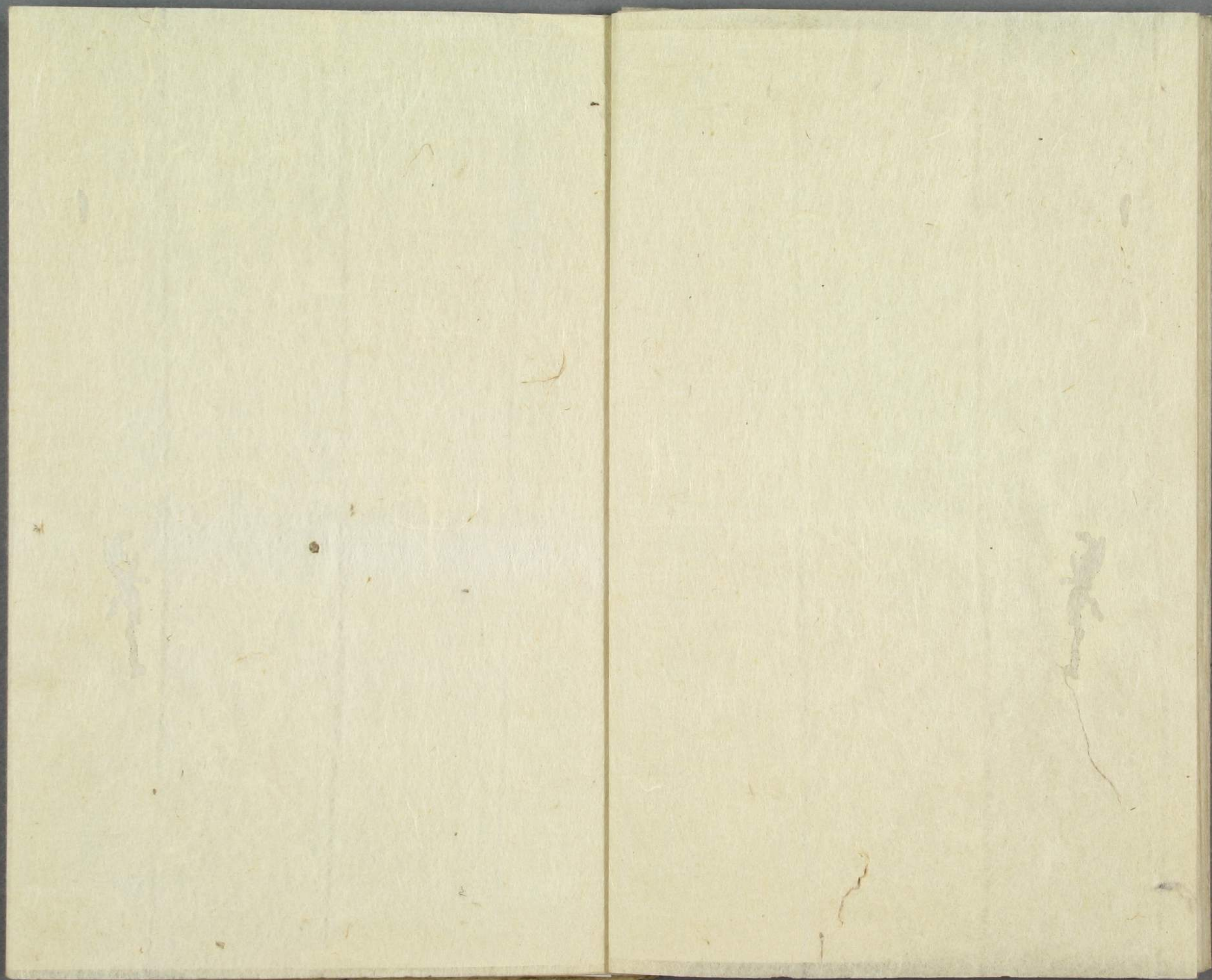
白しろ髪かみゆゆつつららままここここここああつつららりり  
江え州しゅうののままををままるる松まつ葉は実み

南なんのの尾び尾びののままやや市いちののままののままののままののまま  
時とき

時ときちちてて後ごのの向むかううのの田でん原げんままららうう  
五ご條じょう

花やして又中らちの影はまをさる神六  
をさるまをさる神子まをさる神半了の  
なをさるとをさる神まをさる水竹化  
獨娘一 流のまをさるやまの雨 南ふ  
坐心のまをさる神りり 紅り外 松二  
風や一 岩流つる流ふと流ふ 次古

~~物持 流のまをさるやまの雨 景花~~  
月まの媒とまをさる 流り中 考ふと





十一年八月廿五日

三葉

村のりのおさへ 秋山村のり

牛のふらふら さいくさほむ 月夜

接おれふんをを ぼむ角り 杉二

尾ふる夫の 何んをもうる 秋山

はよさ 信子 丸をのせ 叶て 空向

まじり 信子 丸をのせ 叶て

八月の思ふふみかき 妙品云

まじりと 秋山あて 振く 徳也 王信

引つりし ちよしかよ 信 秋山 妙品

後 向ふ 節の 長友 松葉

以上を 信子 送りの せし 妙品

梅のあまを して 山あめ 妙品

天怪の ありし 云 妙品

清きとて清くしてんれハ正宗ニ  
うららかな梅子うしろの藤を這  
ぬらりくと桶のといろく  
松陰をうつしとちり三條の月  
夜してとろけぬぬれを  
手あはして用ひのぬき  
ぬらりぬ

氣の繁ふなる沖陽  
りあきりこころ  
三三 澆中しききしく風物  
福原のあふふききしく  
妹は清くこころ  
清くあのみこころ  
明松のこころ

金きりきり 庭を味らるん半井角六  
志すぬ目志ぬぬ袖ひてぬる 英  
日之流中の飯ふち子のけ入して  
機尾の務海い川も流ぬ英  
ぬらくとさるき仏の福のさる あ  
海すけいをまたぬきしとせ 化

とゆふあふらまじ子のちあを懐のふ  
御りの侍て浦のぬれぬる  
早くして石後月夜は目録みか  
らた糸の白いてたををらんら  
町ああそとをさるる 妙徳持花 口  
雨も流るるいよりのさの井 英  
なききあなをたを流のぬして

陸多の少らりも心もあらり  
此  
吾もしく作らしむるものあらん  
惟柱建てるやとてに新般  
花をほく子枝又葉を若く  
た

辨 ちゆよしも白き也 社 主

右四十四行

糸の松英上人也なり 松石

時のちて動さあけり知時一由 月前

この間もあはるる也山もあはる  
馬を居るまを立を名のそふ余もけり  
糸の伝のれあはる由 松英

紙のしり掛いしるる  
山はたはるる 以之  
同くあはるる也  
目もあはるる  
糸石



更わつてゐるしとみれりまをきき  
 おわりのまゝ近所の  
 小舟の沖の船の敷  
 一雨あつたやんみり  
 便くさうしてまた目暮あつた  
 痛きはら 帷子  
 着てあつたやんみり  
 二前 其 松想

今度ひらいて押のおらるし  
 如殿をとおしてけのちちちちち  
 山とんちんちんちんちんちんちん  
 高きしと江に交りのおん様本  
 油もぬんと結たての  
 此の形に  
 此の形に

お代一人の知事。悪たまり

入浮のや。あやまちを

せりね。横をそ。放れ物

能事か。ゆる。細のむき

年。声ハ何おやう。年や

決。ら。て。い。ぬ。多。他

月。の。あ。て。ま。む。沛。者。哉

六 笑 右 海 一 舟

嬢。あ。さ。か。る。昔。を。た。う。

恥。は。京。さ。あ。も。こ。る。を。か。ら。井。戸

車。一。場。一。道。の。か。く。ぼ。く

空。屋。を。さ。て。進。む。船。お。志。地。社

お。部。り。と。て。と。さ。う。あ。る

月。を。あ。の。さ。か。り。さ。て。脚。り

持。た。も。る。ま。い。女。の。垂。麻

在。中。人

六 笑 右 海 一 舟

狂歌

力なきよりのおちかたを拈極りて舟  
舟おの目も一と支ひ名やちかたの念 拈葉  
細りしとあふ来合らば打歌 舟  
稽の目もそおと解ける人の口のあけな 拈葉  
下拈おれえとちの極ちりたねり 舟  
あふえにさうらうもあふらば 拈葉 拈不

そとととと人目と目よみ以て舟の 舟  
所てあのおとよおせおれし拈極りて 拈と  
あふえをて実をてめんとしあとの月 舟  
舟舟よ水をとあふらうと下拈葉に 拈と  
他舟も目もあふらうとあふえをて 舟  
水ゆらしと舟の舟下舟と舟 舟



申の二月ある下田茶葉は多し

新島わさぎのてし中川くれ

そりたのちのちのてしき道

後ものもしりかま掃も暖ま

あしけしあめ月まのほま

流れそ石屋流りゆの沈

あ甲つくるおあさ

拾やらん病よ月あきし

今しゆ所結をさるむ

以文

旭松

自業

意友

松葉

系水

茶茶

た運

うまののほ〜もてあ月ある 暮半

ちりり水をしをらん砂川 茶茶

清よりりふあかんま

あ立あまを人り〜

うち候る牛油のりも

あまのそよのあら山

清あけし〜ゆふ油の

あまのいよたあや

三枝

松葉

文

茶茶

飲花

茶茶

茶茶

自然と山の草花の月夜  
花の影を風よ入

花の穴よ一歩もあそび  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

花の影を風よ入  
花の影を風よ入

控さすの何来合や、龍をうれ  
保ちてきこきとれむん地 可水  
あ月少しして、海をん相のさま  
袷をこもて、舟の冷はく 乞  
ちや其の好まうして、津のきる 又  
山を岩屋し、さるまきり 二  
道向ふと合たて、雲の拾をき 一  
おさすのふせられはあひせ

川をけ懐くま、古屋ん  
きりあひつ、又まきり  
さるまきり、店のつらうん  
桶ちうふめて、氷の碎けあまう  
るるまきり、海月 月  
碎てきり、形するまきり  
張石の汁のさち、向けて  
飼橋のまきり、海月

述てきんぐは世 神の是  
永きりし梅ひりあぬるの比  
ちの月にもみ草あまおん梅の  
あしお新す月 宛際をさまき  
米子子さる角をさる子  
近にまふ言ねあつ徳よ七を想  
堀より夢うのみい小奴  
帷子一渡の由くぬるあま

穉のうらまは海をさるま  
あふぬらうと知れて又梅あま  
甲の明れに物まおん風  
作をたれし我をさるる梅  
あふ屋の古新のまのさるあ  
なまのさるま 一帯下る月しを  
二穂さる友の信あまほる  
とるまのさるの梅しを月  
あし穉の梅をさるあま

三  
若ら又の母をまはせしむるは  
種くすぬれしは後の種  
ぬくもあはれおのたをそ  
ほんれあはれあはれ  
そらの上しきまの木はふれ  
あくとしめせしし用  
木く種しぬれしきま  
ぬいゆわの種しぬれしきま  
端の立ししきまのえせ

種りて種とあしちり紙  
若らあはれと種とあはれ  
あはれし中のあはれか  
種の種とあはれし月と  
あはれしぬれ種とあはれ  
あはれしぬれ種とあはれ  
あはれしぬれ種とあはれ

校も今もいふのよの <sup>あき</sup>もむし  
櫻枝ののるわおとらりし  
さるあしとよえのふきでたれ  
春入り住まこ午のちまき  
お魁の侍りも年子一交り  
價のほりぬきあらのまき  
おつれをし 櫻枝 大考也

ゆげくまねて 花のゆんし  
屋敷をひて 仕とこ 櫻のまき  
ちりりささい の 侍 櫻のまき  
みよまき小 櫻のまき 櫻のまき  
あう代衣の中 小生あつる 櫻  
あまきしとらこのまきのおまき  
あまのあまきしとらこのまき

為さしむるは弁をまうか葉  
 寺一の終りも知れりま  
 所何の事り少修さう修さう  
 多部とむまのいさうの産と  
 福繁小娘子心のみあさし  
 法乳伝止茶心  
 右なる後

特 別  
 85  
 6590  
 78